

岩手県盛岡市（国内 18 例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要

令和 7 年 1 月 2 日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 基本情報

用途（飼養羽数）：採卵鶏（約 12 万羽）

発生家きん舎の構造：セミウィンドウレス鶏舎（中央の隔壁により 2 つの区画に分かれている）

発生家きん舎の飼養形態：ケージ飼い（1 区画が直立 4 段ケージ 3 列、通路 4 本）

2 農場の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は平地に位置し、周囲には田畑および牧草地が多い。また、近隣には自社系列の養鶏農場 4 箇所を含む養鶏農場が点在している。
- ② 現地調査時、周辺の田畑および浄化池は 20cm 程度の積雪で覆われており、水鳥の生息・痕跡は確認されなかった。農場から約 1.4km 地点にある養魚場と水路でカルガモ約 50 羽、マガモ 8 羽、コガモ 1 羽、合計約 60 羽のカモ類が確認された。また、農場から直線距離で約 14km 地点のダムは全面が結氷し、カモ類は記録されなかったが、約 16km 地点の池では、訪問者による給餌が行われ、オオハクチョウ 217 羽、オナガガモ 184 羽、カルガモ 83 羽など合計約 480 羽のカモ類が記録された。同市内では令和 5 年 11 月にオオハクチョウから HPAI が検出された。なお、地図上では、農場に隣接して浄化池 2 箇所と貯水槽が存在する。
- ③ 鶏舎は 9 棟あり、発生鶏舎は南北に配置され、他の 8 棟は東西に配置されていた。
- ④ 全ての鶏舎が集卵バーコンベアで GP 室と接続されていた。また、全ての鶏舎は裏口通路で繋がっていた。調査時、鶏舎 4 棟は空舎であった。

3 通報の経緯・発生時の状況

- ① 発生鶏舎の片側の区画（約 2.1 万羽、通報時 475 日齢）では、過去 2 日の平均死亡羽数が約 3 羽だったが、12 月 31 日の朝、25 羽の鶏が死亡しているのを確認。夕方の見回りも含めて合計 64 羽の死亡が確認され、死亡鶏は中央付近のケージ上層階で固まって死亡している傾向にあった。さらに翌 1 月 1 日も 43 羽の死亡を確認したため、家畜保健衛生所に連絡したとのこと。同鶏舎では死亡鶏以外、餌のくいつき、活力や産卵率に異常はなかったとのこと。
- ② 調査時、発生鶏舎の中央付近で死亡鶏および沈鬱状態の鶏が固まっている箇所が確認された。

4 管理者及び従業員

- ① 当該農場では社員 12 名が勤務しており、内訳は、飼養管理担当者 2 名、鶏糞処理担当者 1 名、GP 室担当者 9 名であった。飼養管理担当者が全鶏舎を対象に毎日健康観察を行っているとのこと。
- ② オールアウト時の清掃などの作業のため、パート従業員が随時農場で作業しているとのこと。なお、直近のオールアウトは夏前であったとのこと。
- ③ 系列農場間の従業員の兼務はないが、農場長以上の役職者は複数農場を訪れることもあるとのこと。役職者が、鶏舎に立ち入ることは通常ないが、入った場合は、本社でシャワーを浴びた後、次の農場に向かっていたとのこと。

5 農場の飼養衛生管理

- ① 当該農場の衛生管理区域入口は 2 か所あり、片方の入り口にはチェーンが設置されていたが、立入禁止の看板や消毒設備は設置されていなかった。飼養管理者による

と、車両の入退場時には、発生農場から約 300m 離れた自社系列農場共用の消毒ゲートで消毒し、衛生管理区域入口では、消石灰帯を通過しているとのこと。

- ② 飼養管理担当者は、衛生管理区域内にある事務所で衛生管理区域専用の作業着及び長靴に交換し、手袋を着用の上、農場内に入場するとのこと。
- ③ 従業員が鶏舎に入る際は、作業時に各自事務所に併設されたロッカーより持ち出した鶏舎内用の長靴（全鶏舎共通）に履き替え、鶏舎入口の踏み込み消毒槽（逆性石鹼及び消石灰、汚れたら都度交換）で靴を消毒しているとのこと。通路でつながっている鶏舎間を移動する際は、長靴交換及び踏み込み槽消毒は実施していない。
- ④ 衛生管理区域内には、主に飼料運搬と集卵の業者が入るとのこと。飼料運搬業者は来場する際、当該農場専用の車両を使用しており、衛生管理区域内で車を降りる際には当該農場専用の靴に履き替えているとのこと。集卵業者は系列の複数農場共通の車両を使用しており、各農場で専用の靴に履き替えているとのこと。専用服への更衣はしていないとのこと。そのほか、雛導入は、自社の従業員が、また廃鶏出荷については、廃鶏処理業者が来場して実施しており、直近の出荷は夏前であったとのこと。
- ⑤ 集卵バーコンベアは全て集卵室に直接つながっており、屋外に露出する行程はなかった。
- ⑥ 給餌及び給水については、鶏舎内のラインを通して自動で行われる構造であった。
- ⑦ 発生鶏舎内の換気は、通常、鶏舎前面から排気し、鶏舎奥から入気するトンネル換気であるが、冬期はトンネル換気を行わず、鶏舎側面及びモニターに設置された入気口の開閉により温度調節を行っている。
- ⑧ 飼養鶏への給与水として用いられる水は全て地下水を塩素消毒して用いているとのこと。
- ⑨ 発生鶏舎では、鶏糞が鶏舎の下部に設置された除糞ベルトに落ちるようになっており、鶏糞投入口に蓋はされていなかったが、除糞ベルトの舎外走行部は上部・側面ともにカバーで覆われていた。鶏糞は、ほぼ毎日農場外の堆肥処理施設までダンプを用いて搬出しているとのこと。
- ⑩ 死亡鶏は毎朝の健康観察時に回収し蓋付き容器に入れた状態で鶏舎内において一時保管後、処理業者への搬出時間に合わせて、その状態で発生農場から約 300m 離れた農場外の輸送車両への積替え場所に運搬し、同様の状態で運搬された自社系列農場の死亡鶏と一緒に、処理業者に向けて自社で輸送しているとのこと。死亡鶏の積替え場所への運搬は、各農場の飼養管理担当の従業員が行っていたとのこと。
- ⑪ 廃棄卵については、各鶏舎で集めたものを密封容器に保管し、ある程度溜まったら農場外の堆肥処理施設へ車両を用いて搬出し堆肥化処理していたとのこと。
- ⑫ 鶏舎ごとにオールイン・オールアウトを実施しており、アウト後と導入前に清掃・消毒を行い、空舎期間は約 20 日間であるとのこと。
- ⑬ 発生鶏舎側面の開口部には、網目 2～2.5cm の亀甲金網が張られており、金網の内側にはロールカーテンが設置されていた。金網の破損は確認されなかったが、発生鶏舎の天井、壁や床には複数の隙間が確認された。

6 野鳥・野生動物対策

- ① 調査時には、発生鶏舎内には、複数のラットサインを認め（かじり跡、糞）、別の鶏舎では糞等の他、生きたネズミ及び死亡したネズミも確認した。月に一度、殺鼠剤によるネズミの駆除を業者に委託しているとのこと。
- ② 農場敷地内では、数羽のカラスを認めた。数年前に発生農場周辺でカラスが多く死亡し、HPAI が確認された経緯があったことから、カラス対策として音による威嚇、レーザーの設置等を行っているとのこと。
- ③ カラスとネズミ以外に、ネコ、キツネ、イタチ、スズメ等を農場内又は周辺でみかけるとのこと。また、ハエは特に夏期によく見かけるとのこと。

（以上）